

批評

怪物と戦う者にならないために

——書評 : David Livingstone Smith, 2021, *Making Monsters: The Uncanny Power of Dehumanization*. Cambridge: Harvard University Press.——

伊藤京平*

本書は非人間化の理論を著した学際的研究成果であり、主に人類学、心理学、哲学の文献を参照しながら史実——19世紀末南アメリカでの白人による黒人へのリンチから、ナチスによるユダヤ人虐殺、さらにはルワンダ紛争でのフツによるツチの虐殺まで——の分析を行っている。著者デイヴィッド・リヴィングストン・スミスによれば、他者を人間に満たない存在 (less than human beings) として扱うことはわれわれの歴史に深く根ざしているものの、これまで社会心理学の一部を除いて体系的な研究は行われてこなかった (p. xiii)。

近年社会心理学で取り組まれてきた非人間化をめぐる研究の総説としてクテイリーとランドリーによるものがある¹。そこでは非人間化の理論的枠組がジェノサイドを理解するために築かれたことや、その後の展開としてより日常的な現象へ適用されるようになったことが示されている。元来の研究内容は主に外集団に対する「人間性の付与」、「心の帰属」、および「人間以外の動物と結びつける言動や行動」の有無だったのだが、今では内集団における人間関係の問題も非人間化の文脈で語られるようになったということである。クテイリーとランドリーはそれら膨大な非人間化にまつわる研究を、明示的/暗示的非人間化、微妙な/露骨な非人間化といった枠組で分類する一方、広義の非人間化概念の包括度があまりにも高くなってしまふことを懸念しており、対象者が人間として分類されない事例のみを扱うべきだと主張している。したがって、ポール・ブルームも指摘する²ように、何であれ他人に否定的な態度を非人間化と形容する潮流は、非人間化の学術的意義を失わせかねない。

そのような状況下で、本書は「極めて狭義の非人間化」を探求している。スミスが拠る所とするのは、(I) 心理的本質主義、(II) 内集団中心主義および生物の階層制、(III) イデオロギーの正当化である。非人間化のプロセスを確認すると、第一に、生物が種 (species) や人種 (race) に基づいて分類される。スミスによれば、たとえ科学的に種および人種概念が否定され、教育によって「正しい知識」が普及したとしても、われわれの本質主義的傾向は身を潜めるのみで消えることはない (p. 70)。第二に、自らの所属する内集団への帰属意識が形成される。種や人種だけでなく、国籍、宗教や民族も帰属先になりうる。そして人間社会は種に基づく階層制——人間 (西洋思想史の文脈では神の似姿) を頂点とした生物のヒエラルキー——と切り離すことができない。第三に、イデオロギーに基づくある種のインセンティブが与えられる。すなわち内集団の優位化と外集団の劣位化、および外集団に属する人々の排除が損失回避の条件として要請される。排除の対象は蛆虫、犬、猿などの動物、あるいは超人と称される——超人も人間を疎外するという道徳的修辭によって人間に満たない存在に仕立て上げられる。

スミスによれば、これらのプロセスが他人を完全に人間であると同時に完全に人間でない存在 = 怪物に至らしめる。つまり非人間化の対象は、一方では人間に分類され、他方では人間に満たない存在に分類されるのだが、その論理的 (に矛盾した) 帰結として怪物が生じるということである。スミスは怪物の不気味さを——メアリー・ダグラスの穢れに関する文献、ダグラスに依拠してホラー映画に登場する怪物の恐怖を論じたノエル・キャロルの理論、エルンスト・イエンチュによる不気味さに関する論考、果ては森政弘の「不気味の谷」まで参照しながら——「人間でありながら人間でない」ことの両義性に落とし込んでいく。

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度入学 表象領域

スミスの理論に関して注意すべきは、非人間化の (A) 重要な因子であるイデオロギーが一般的な社会心理を逸脱していることと、(B) 行為者/被行為者ともに人種や民族など特定の社会集団に紐づけられていることである。例えば、妊娠中絶に非人間化概念が適用されることもあるが、スミスはそういった論述に否定的な見方を示しており、ナチスが「ユダヤ人女性の胎内の胚」を非人道的に扱った事例についても、ユダヤ人という人種カテゴリーの構成員が人間に満たない存在として扱われた結果であり、単に胚が非人間化されたわけではないと言及している (pp. 261-4)。したがってスミスの取り組みは非人間化概念の狭義化として捉えられる。さらに理論が抽象的であるがために考慮すべき例外を取りこぼしているようにも見える——イデオロギーは個人心理に帰属できないとはいえ、非人間化に向かう個人の心理状態、あるいは個人間の差異は描かれていない。ゆえに本書は人間心理を詳細に捉えるような精度を有さないが、大枠の理論に基づいて非人間化に該当する事例を明示し、その分析を演繹的に行うものと位置づけられる。

「心理的本質主義」と「イデオロギーへの同調」をそれぞれ人間の「本質主義的傾向」および「構築主義的傾向」と換言すれば、本書における非人間化の根幹はそれらの齟齬に見出されるが、種や人種を巻き込む本質とはいかなるものか。心理的本質主義における本質は人間の認識する「あたかも不変の構造」である。では、人種概念を隠蔽することの弊害はあるだろうか。非人間化のメカニズムを参照すると一つの回答が得られる。それは人間が本質的に他人を何らかの人種——名辞は後付けであるにしても——に分類するならば、人種概念を排斥する構築主義的試みは、その対象を非人間化とは異なる形で「怪物」にしかねないということである。生物学（および心理学）は差別に関わる負の歴史を持つ一方で、人種主義に抗するあまり人種による差異を不当になきものにしてしようとした事例³も抱えている。人種の優劣をつけることは不可能だが、結果として人種概念そのものを覆い隠す流れがより強くなった現在、人間の本質主義的傾向を取り除くことなどできないと論じる本書は、ある種の科学的知と人間心理の離合⁴を考えるうえで重要な視座を提供している。

スミスは人類の獲得した超社会性 (ultrasociality) の落し子こそが非人間化であると結論づける (pp. 256-7)。ジョージ・オーウェル『動物農場』に登場する理念を適用すると、われわれにとって易き流れは「すべての人間は平等だが、一部の人間は他よりもっと平等である」⁵と判断することなのだ。それゆえ社会集団を超越した個人間の差異の称揚もまた、その行き着く先が理想郷とは限らない。畢竟するに社会集団間の差異を誤りとする科学的啓蒙にとどまらず、差異に囚われる人間の素朴な傾向を認めたとうえで、囚われに忍び寄る思想に抗すること、また社会集団からの離脱/越境可能性を探り続けることが必要なのではないか。

注

- 1 Kteily, N., and Landry, A., 2022, "Dehumanization: Trends, Insights, and Challenges," *Trends in Cognitive Science*, 26 (3): 222-40.
- 2 Bloom, P., 2022, "If Everything is Dehumanization, then Nothing Is," *Trends in Cognitive Sciences*, 26 (7): 539.
- 3 Gould, J., 1981, *The Mismeasure of Man*, New York/London: W.W. Norton and Company. グールドに対する批判として、Lewis, J., DeGusta, D., Meyer, M., Monge, J., Mann, and A., Holloway, R., 2011, "The Mismeasure of Science: Stephen Jay Gould versus Samuel George Morton on Skulls and Bias," *PLoS Biology*, 9 (6): 1-6. がある。
- 4 米国人類遺伝学会 (ASHG) によれば、生物学的に人類をサブカテゴリに分類することは不可能である。一方、人間の幼児は前言語的段階で人種をはじめとした社会集団を認識し、特定の社会集団への選好を示すことが指摘されている。詳しくは American Society for Human Genetics, 2018, "ASHG Denounces Attempts to Link Genetics and Racial Supremacy," *The American Journal of Human Genetics*, 103: 636. および Rhodes, M. and Baron, A., 2019, "The Development of Social Categorization," *Annu Rev Dev Psychol*, 359-86. を参照。
- 5 Orwell, G., 1945, *Animal Farm*, London: Secker and Warburg. (山形浩生訳, 2017, 『動物農場』早川書房.) 一部改変。